

地域の課題 私たちはこう考える

能代高ニューウィルプロジェクト

能代高（京久夫校長）で、1、2年生が地域のさまざまなテーマを取り上げ、グループ・個人での探究活動に取り組んできた。このうち、高い評価を受けた生徒たちによる「優秀発表会」がこのほど開かれ、研究の成果が披露された。高校生たちが、どのような地域課題に関心を抱き、調査研究を進め、どんな提言活動を行ったのかを報告する。（佐藤 拓人）

1、2年生優秀発表会

同校では、夢と志を持った生徒の育成を目指すキャリア教育・ウィルプロジェクトを導入（今年度からニューウィルプロジェクト）し、専門家を講師に招いた講演会や職場体験などを実施。昨年度から2年間は県教育委員会の「探究活動等実践モデル校事業」の指定を受け、1、2年生が地域の課題解決などに向けて主体的な学習に取り組んでいる。

今年度は1年生220人がマアグリマグリーンマヘルスワライヴマツーリズム——の5領域の中からテーマを選び、38のグループに分かれて活動。2年生237人は自分

たちでテーマを決め、個人での探究に臨んだ。昨年12月に1年生は領域別、2年生は学級別で発表を行い、特に評価が高かった研究成果を披露する優秀発表会をこのほど開催した。会場の体育館には1、2年生のほか、活動に協力した大学教授や能代市の職員、地域住民らも集まった。

はじめに、1年生の各領域を代表する5班が登場。このうち、観光や文化振興などについて調べる「ツーリズム」では、細川蓮君を班長とする男女6人の班が「けっするがた〜どの世代も楽しめる廃校舎での体験〜」と題して発表。今年3月末で閉校する同市鶴形小の校舎を活用し、外国人を中心とする観光誘客を促す宿泊体験プランを提案した。

本県で年々増えている外国人宿泊者への対応の必要性を指摘。廃校になった小学校を宿泊研修施設としてリノベーションした群馬県みなみ町の「泊まれる学校さる小」などの事例を紹介した上で、鶴形小を活用した場合、そば打ちや鶴形牛のバーベキュー、郷土芸能・鶴形ささらの体験など校舎を拠点に地域の魅力を存分に味わえるプランを企画。「鶴形小をきっかけに能代市が活性化してくれれば」と期待を込めた。

また、日本の英語教育の在り方について考えた武田英恵さん（2年）は、2020年の



1、2年生が探究活動の成果を披露した優秀発表会

東京五輪や教育改革などで英語への関心が高まっていることに注目。一方で、英会話を使いこなせるまでに至らない現在の英語教育の問題点について、米国語学研修に参加した体験や各種メディアの活用などを通して調べた結果、「英語の授業に受け身で臨み、情報をインプットしてもアウトプットしていないから」と結論付けた。

小学校では英語を専門としない教諭が指導し、中学校では英語で話す機会が少なく、大学受験対策が中心となる高校ではさらに話す機会が減少すると指摘。英語を身につけるためには「誰よりもコミュニケーションを意識する」「理解できなくても諦めない」「長文を読んだら友達と話し合う」といったことが必要になるとし、「とにかくアウトプットが大事。生きた英語に触れる機会を増やし、間違いを恐れないでほしい」と呼び掛けた。

このほか「秋田の特色を活かした建築」と題して発表した熊谷翼君（2年）は、冒頭で「小さい頃から建物の構造やデザインが好きで、将来は建築に関わる大学や仕事に就きたいと考えている。地元の秋田と建築を結び付けたいと思った」とテーマ設定の理由を説明。インターンシップで県庁の建設政策課を訪れたほか、県立大、岩手大のオープンキャンパスで建築学の講義を受けたという。

本県の気候や産業など四つの点から調査し、「保温性や断熱性、調湿性に優れている秋田杉を材料に使う」「光を反射・拡散できる白を基調として明るさを感じさせる」といった特徴の建物を提案。また、本県で高齢化が進んでいることから「周りのものをユニバーサルデザインにする」と安全面も考慮。細部までこだわった建物に、生徒たちは関心した表情を浮かべていた。



熱のこもったプレゼンテーションを繰り広げる代表生徒ら



さまざまな課題について改善策を提案



メモを取りながら真剣な表情で耳を傾ける